速報　青葉学園跡探索記（2）
――蛇体道･青葉峠に達す――

大滝会特別会員
鹿摩貞男
（万世大路研究会）

はじめに

青葉学園（蛇体園舎）跡には、昨秋平成 29 年 11 月茂庭側（福島市飯坂町茂庭／旧伊達郡茂庭村）から烏川林道を利用して到達している。大滝側（福島市飯坂町中野大滝／旧信夫郡中野村大滝）すなわち蛇体道を通ってはまだ到達していない。昨夏（平成 29 年 7 月）に第 1 回目の挑戦をしているけれども、蛇体道（茂庭側）の途中、横川（本川烏川）を渡河したところで時間切れとなり引き返した。今回は、さらに進んで青葉峠に到達することができたので報告する。当該地点は、青葉学園跡とは文字通り指呼の距離にあると思われるけれども、やはり時間切れで最終目的地であるところの青葉学園跡までには残念ながら行けなかったものである。本稿は、蛇体道大滝側からの第 2 回目の探索記となる。

報告の前に、青葉学園及び蛇体道について初めて耳にされる方もおられると思うので、あらかじめ若干の説明をしておきたい。詳細については下記のサイトをご覧下さい（当大滝会 HP）。

http://ootaki.xsrv.jp/aobahonbun.pdf

（「青葉学園跡探索記、蛇体道･青葉谷遠し」平成２９年７月）

なお、昨秋茂庭側から烏川林道を通って青葉学園に到達した記録については、下記サイトをご覧頂きたい（当大滝会 HP）。

http://ootaki.xsrv.jp/aobajyataisokuho2.pdf

（速報「青葉学園蛇体園舎跡に到達」平成 29 年 11 月）

【青葉学園】

参考写真－1　青葉学園蛇体園舎（昭和 21 年）絵画
青葉学園様提供（たんぽぽ館）

青葉学園とは、国語学者・ローマ字教育学者として知られる三尾 砂氏（明治 36 年（1903 年）2 月～平成元年（1989 年）8 月、享年 86、香川県出身）によって戦後間もない昭和21年6月に設立された私立小学校を兼ねた児童養護施設である（遡って 5 月には既設建築物を利用し園舎を設置）。その青葉学園小学校の始業式は昭和 21 年 6 月 5 日生徒 7 名、職員 5 名でおこなわれたという。その学園の設置場所というのが、旧国道 13 号（旧万世大路）の大滝集落（福島市飯坂町中野）の西外れ旧西川橋（2 代目）付近を起点として旧茂庭村字蛇体（蛇タイ）に至る通称蛇体道の終点に所在した蛇体鉱山（正式名称茂庭鉱山）の事務所跡である（蛇体園舎・**参考写真－1**）。

同地での存続期間は同年 10 月までの僅か半年ほどで旧中野村大桁地区に移転しているけれども（大桁園舎）、その設置移転準備（引越し等）にあたっては当時の大滝集落の方々の献身的な協力があったと伝えられている（当初の蛇体園舎設置にあたっても大滝集落の方々が協力）。半年で移転することになったのは、冬期 3m以上の積雪に見舞われ外界から孤立する蛇体地区では冬は越せないという地元大滝のかた達の助言によるという。

青葉学園は、その大桁園舎には昭和 23 年 10 月まで 2 年間所在し、その後、大滝集落と奥羽本線赤岩駅を結ぶ通称赤岩道（別名救済道）との中間付近の俎山（現福島市大笹生俎山）に移転している（俎山園舎）。俎山園舎は、昭和 23 年 10 月から昭和 30 年 6 月まで約 7 年間所在した。青葉学園はその後、福島市内土船に移転し現在社会福祉法人（昭和 28 年 3 月 10 日認可）の養護施設として運営されている。

青葉学園は前述の通り当初養護施設及び学校施設として開設、三尾氏独自の教育理念に基づきローマ字教育実験小学校として生徒の教育にあたった。その後私立学校法の施行などもあり私立青葉学園小学校は昭和 26 年 3 月に閉鎖されている（その後は養護施設のみの運営）。このローマ字教育実験の最終的な結果は小学校の閉鎖により得られなかったようであるけれども、三尾砂氏は、ローマ字教育学者その第一人者として日本におけるローマ字教育に貢献し大きな功績を残している。

（参考『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』（平成 8 年 6 月、社会福祉法人青葉学園、以下『50 年史』）

【蛇体道】

蛇体道は、旧国道 13 号大滝地区（旧西川橋付近）から蛇体鉱山（銅鉱山）まで続く約 6ｋｍの林道（鉱山道路）のことで地元の方による通称名である。なお、前著『青葉学園跡探索記』（ネット著書）では蛇体道が烏川林道に続いて茂庭まで通じているとしていたがそれは別ルートのことであり（後述参照）、蛇体道としてはあくまでも蛇体鉱山が終点であってその先に道はなく鉱山から烏川の約 600m下流右岸にある烏川林道とは繋がっていないことをお断りしておきたい。

蛇体鉱山（正式名称は茂庭鉱山）は銅鉱山で旧伊達郡茂庭村字蛇体（現福島市飯坂町茂庭字蛇体）に位置し、江戸時代に発見され昭和 18 年頃まで稼行（鉱物を産出すること）されていたようである。蛇体道はその鉱石運搬路として開かれたものと考えられる（明治 41 年測図の 5 万分の 1 地形図には旧西川橋から蛇体鉱山付近まで小径（1m未満）が表示）。道路の幅員については、残存蛇体道の保存状況の良い所では 3m程度はあるように見える。戦後蛇体道は砂利敷補修工事が行われているけれども、その時の補修幅は 2.5mとなっている（『福島土木監督所五十年史』昭和 30 年 5 月 1 日、福島県）。

蛇体鉱山（蛇体坑）は、烏川右岸に位置しその事務所･飯場（宿泊所）が対岸の左岸に建てられていた。青葉学園は、その残存していた建物を利用し開設されたものである（蛇体園舎）。

蛇体道は前述の通り、旧蛇体鉱山が終点となっていて茂庭までは続いていない。鉱山から約 800m下流には、烏川左支川枯松沢が流れ込んでいる。その対岸右岸には、茂庭梨平地区（現在摺上川ダム湖底）から続く烏川林道がありそのほぼ終点（枯松沢から 200～300m上流）となっている。

この蛇体道について、我々は林道（鉱山道路）と称しているけれども、林野庁が定めている「林道規定」上の林道（幅 1.8m以上の車道）に限るものではなく、歩道などを含め山中にある或程度の規模の山道を通称して呼んでいるのでお断りしておきたい。

なお、河川の場合源流（上流）を背にして左側を左岸（左側から本川に合流する支川を左支川）、右側を右岸（右側から本川に合流する支川を右支川）と称している。因みに道路の場合は起点を背にして左右を云う。

蛇体道の文字通りの峠となるクビト峠（標高約 730m）は、旧信夫郡（中野村）と旧伊達郡（茂庭村）との郡境でもあった。旧信夫郡に属する旧西川橋起点からクビト峠までは上り坂で約 3.5ｋｍあり、こちら側を便宜上大滝側と称することとする。また、旧伊達郡に属するクビト峠以北は基本的に下り坂であるがアップダウンがあり途中青葉峠（標高約 710m）を含み終点蛇体鉱山（青葉学園）までの約 2.5ｋｍ区間を便宜上茂庭側と称することとする。

クビト峠へ（蛇体道・大滝側）

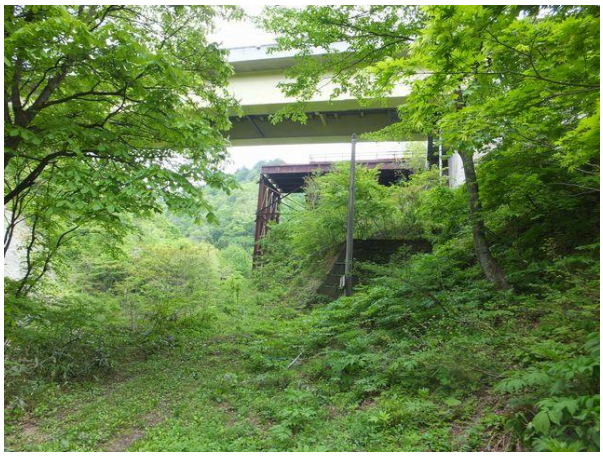
平成 30 年 5 月 13 日（日）、現国道 13 号西川橋（3 代目）下の旧西川橋（2 代目、旧国道 13 号）のたもとに朝 8 時集合する**（写真-1①）**。天候は曇り、帰路には弱い雨が降ってきて最後の小 1 時間は結構な雨降りとなる。

写真－1①　集合地点（現国道 13 号 3 代目西川橋下）。道路は蛇体道、奥が旧国道 3 号万世大路で右側に 2 代目旧西川橋あり。

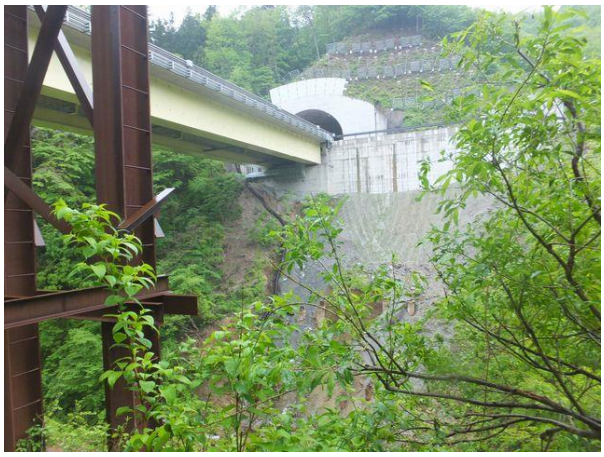
参加者は、山口屋散人さん、dark-RX さん、猫旅おばらさんと筆者の 4 名である。

8 時 10 分過ぎ出発する。

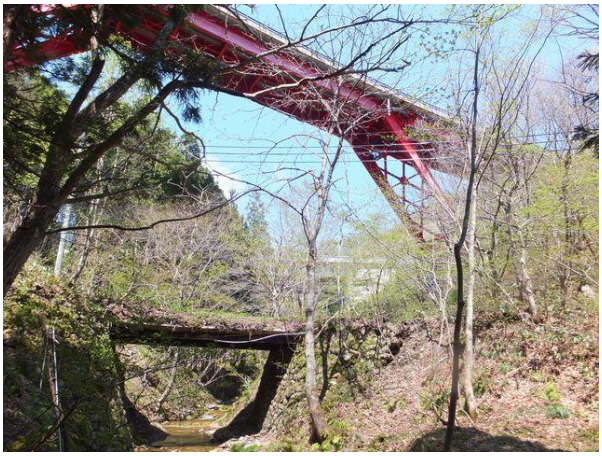
蛇体道起点付近の上には、現国道 13 号と昨秋（平成 29 年 11 月 4 日）開通した東北中央自動車道（E13）が併行して走っている。工事用の仮橋が半分撤去されていて、自動車道路としては東北最長の栗子トンネル（L=8,972m）の坑口を蛇体道からも見ることができるようになった**（写真-1②③）**。またここでは、3 代に亘る現役の新旧西川橋を一望することができる極めて希な場所でもある**（参考写真－2）**。



写真－1②　集合地点（国道 13 号西川橋）から蛇体道（クビト側）入口の新西川橋（東北中央自動車道 E13）を望む。



写真－1③　蛇体道（大滝側）から E13 栗子トンネル（L=8972m）福島側坑口を望む。右端避難坑



参考写真－2　3 代にわたる西川橋。

下から

旧国道 13 号 2 代目西川橋 L=8.5m、W=4.5m、大正 12 年完)、

写真中央薄く見えるのが 4 代目 E13 新西川橋（L=77m、W=10.5m、H20.10 完）

3 代目現国道 13 号西川橋（L=98.8m、W=8.0m、S39.9 完）

起点付近では、山（クビト峠）の方に向かって左側が西川の本川で、向かって右側から左支川の横川が合流する。蛇体道の大滝側は、クビト峠までその横川は深い谷になっていてその谷間に沿うようにある。起点付近では蛇体道はほとんど山に戻っている感じであり藪こきだ**(写真-1④⑤)**。

写真－1④　蛇体道起点付近からクビト峠方向を望む。左が西川（小川左支川）、右が西川左支川横川（本川西川）。

写真－1⑤　入口から数分、蛇体道（大滝側）の藪化。道幅は広い。クビト峠方向を望む。

なお、横川というのはあちこちにあり本稿でも 2 箇所出てくる。紛らわしいのでそれぞれにカッコ書きで本川を示して区別することとする。上記大滝側にある西川左支川の横川は横川（本川西川）、後に出てくる茂庭側にある烏川の右支川の横川は横川（本川烏川）と表示するので予めお断りしておきたい。

ところで、クビト峠までは前回報告済みなので（前掲拙著『青葉学園跡探索記、蛇体道・青葉谷遠し』平成２９年７月参照）、写真については今回の最新版のものを掲載するけれどもルート説明は最小限にしたい。

さて、10 数分で起点側のブッシュを越えカーブを曲がると最初の沢が現れる。前後の道路は崩落して消滅乃至（ないし）消滅寸前の状況となっており通行はかなり危険であるが、のちの茂庭側から比べればまだ楽な方と云えるかも知れない**(写真－2①～③)**。

写真－2①　　最初の沢・危険箇所。クビト側を望む。

写真－2②　　最初の沢・危険箇所。沢右岸から蛇体道起点側（旧西川橋）方向を望む。
沢前後の道は消滅。

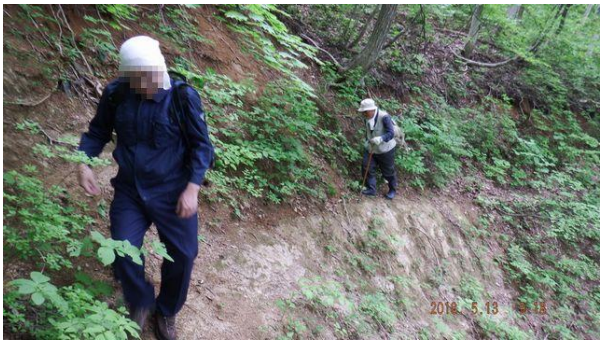
写真－2③　　最初の沢の右岸側から起点側方向を望む。
写真左側、道が消滅。

以降いくつかの沢及び危険箇所を渡る（**写真－3①～④**）。

写真－3①　　沢状箇所を越える。

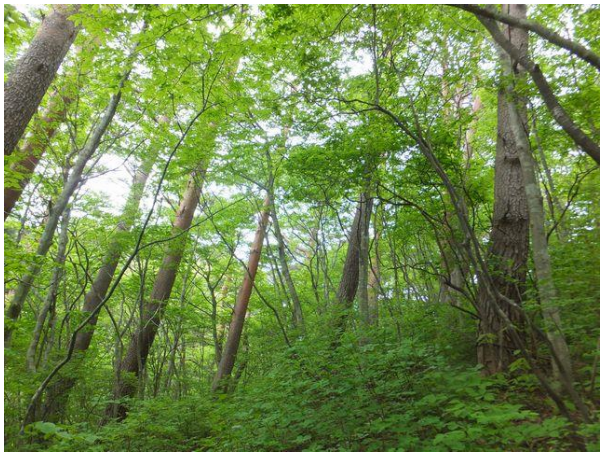
写真－3②　　出発から 30 分、2 番目の本格的な沢。
前後の道路消滅。

写真－3③　　小さな沢が蛇体道を横断。約 1.1km付近



写真－3④　　蛇体道（大滝側）、道が消滅寸前の危険箇所。 赤松原生林手前。
山口屋散人さん提供

1 時間 30 分ほど歩くと太くて高い見事な赤松の原生林が続いているとところに出る。前回探索の際にはさほど意識していなかったけれども、改めて見てみると 1ｋｍ以上は続いているように思われる。この区間は比較的平坦で蛇体道の面影が良く残存しているところがあるかと思えば、何処が道か分からないほど藪化しているところもあり、また危険箇所もある**（写真－4①～⑤）**。



写真－4①　　赤松原生林（出発地点から 1.5km～2.5km付近）

写真－4②　　赤松原生林（出発地点から 1.5km～2.5km付近）

写真－4③　　枯れた赤松の老大木。
高さ数十メートルか。

写真－4④　　蛇体道（大滝側）、残存状況比較的良好箇所。

写真－4⑤　　どこが蛇体道かブナ林、
藪化が進行。

クビト峠の手前には、横川（本川西川）の源流になると思われるような大きな沢が 2 箇所ありそれを越えると急な坂になってクビト峠が見えてくる**(写真－5①～④)**。

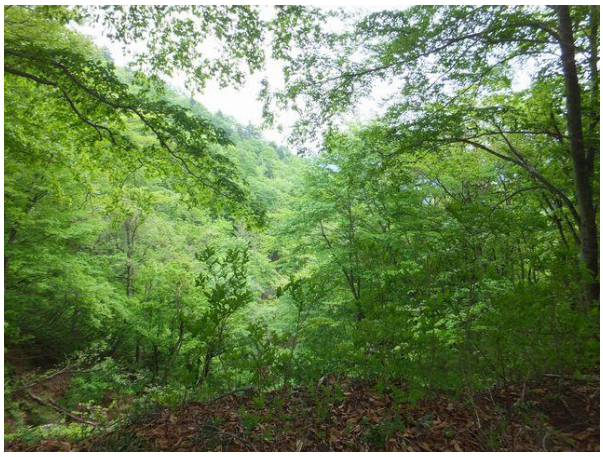
写真－5①　　クビト峠二つ手前の深い沢を大滝側
から望む。 横川（本川西川）の源流

写真－5②　　二つ手前の沢を越える。
山口屋散人さん提供

写真－5③　　クビト峠手前の深い沢を越える。
大滝側から望む。横川（本川西川）の源流

写真－5④　　大滝側からクビト峠を望む。
坂を上ると峠。

午前 11 時前、2 時間半ほどかけて約 3.5ｋｍ歩きクビト峠に到着した**(写真－6①～③)**。



写真－6①　　クビト峠到着 10:55a.m.(L=3.5km、2°30′)。蛇体道起点方向を望む。

写真－6②　　クビト峠西側のブナ林、青葉一色だ。

写真－6③　　クビト峠、大滝側上り口を望む。

クビト峠は、前述の通り旧信夫郡（中野村）と旧伊達郡（茂庭村）との郡境になる。かつて大滝集落の方々は小一時間で旧西川橋からこの峠に到着したという。道の状況が今とは比較にならないだろうが、昔の人は早かったようだ。

青葉峠へ(蛇体道･茂庭側)

クビト峠の北側は若干藪化しているけれどもすぐに平坦で広く比較的良好な道路が現れヒノキ林（桧林）まで続く。中間付近には、蛇体道が崩落し（20 メートル程度）急斜面になっているところがあるけれども、立木に捉まりながら進む**(写真－7①～④)**。

写真－7①　　クビト峠茂庭側下り口(北側)、藪化。

写真－7②　　クビト峠を茂庭側から望む。比較的良好な道。

写真－7③　蛇体道（茂庭側）崩落消滅、
急斜面危険箇所を進む。（帰路）

写真－7④　蛇体道（茂庭側）のヒノキ林。
クビト峠から 40 分（数百メートル）。
この先から急坂、クビト方向を望む。

前回探索時には、そのヒノキ林から左側にあった葛折（つづらお）りの山道を沢の方に下ってみたが行き止まりで、沢は谷になっていて対岸には渡ることもできない。また対岸（左岸）には道路のようなものは見えなかった。

蛇体道（茂庭側）の本線はヒノキ林からまっすぐの道のほうで、峰筋になると思われるが急勾配となりクビト峠から 30 分ほどのところで横川（本川烏川）に到達し最初の渡河となる。この後、同じ横川を 2 回渡河、都合 3 回同じ横川を渡ったことになる**（写真－8①～⑤）**。

写真－8①　急坂の終点、第1回目渡河地点、
横川（本川烏川）を望む。

写真－8②　第1回目渡河、横川（本川烏川）。

写真－8③　第1回渡河後、一旦山側に入る。

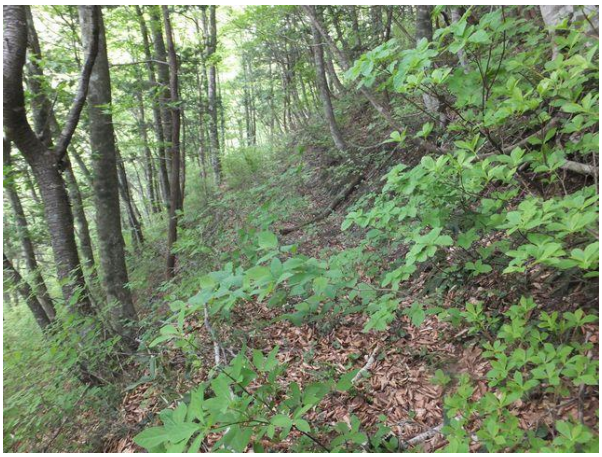
写真－8④　第 2 回目渡河地点、横川（本川烏川）。

写真－8⑤　　第 3 回目渡河地点、横川（本川烏川）。

3 回目の渡河後は本格的な山道となり山腹を進む。道は狭くこれが蛇体道かと思わせるような状況でまるで杣道（そまみち）（きこりが通る細い山道）のようである。進んで行くと道は左カーブになり石楠花の群生しているところを回り込んで少し進んだ所で道は消滅していた**（写真－9①～④）**。

写真－9①　　横川を越え、山側に入る。
残存蛇体道（茂庭側）を進む。

写真－9②　　一休み。
道幅狭く杣道（そまみち））のよう。



写真－9③　　休憩箇所からクビト峠側を望む。

写真－9④　　石楠花群生。蛇体道（茂庭側）横川渡河後最初の沢（危険箇所）手前のカーブ箇所。

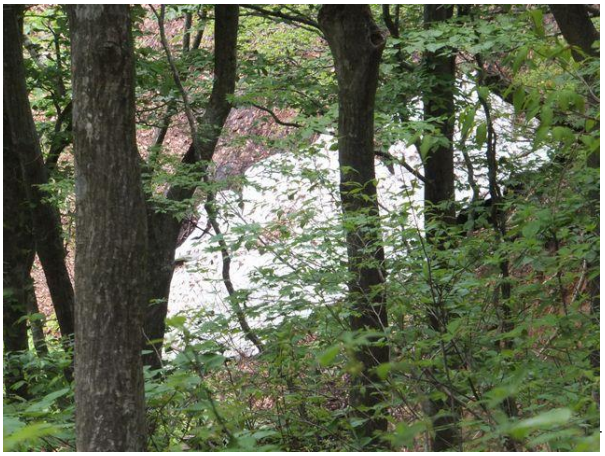
前方には深い沢が望まれ、対岸には残存蛇体道と思われる小径が見える。沢の上流と下流には残雪が見えた。道路は、崩落してなくなったものと思われるがその痕跡もなく急崖が数十メートルにわたって続いている。特に沢の近くは大変な急崖で捉まる草木もなく dark さんが一歩一歩、エベレスト登山ではないけれど、足場を固めながら慎重に前進し筆者はその後を追った。今回ルート最大の難関である**(写真－10①～⑤)**。

写真－10①　茂庭側の最初の難関、最大の危険箇所。 手前左側(沢右岸)道は完全消滅)、対岸(沢左岸)には残存蛇体道が見える。

写真－10②　最大難関(危険箇所)の沢越え、先頭者が道を付け進む。沢上流に残雪が見える。

写真－10③　沢右岸を左岸から望む、蛇体道(茂庭側)は完全に消滅、急崖(きゅうがい)となっている。写真奥、残存蛇体道。

写真－10④　沢を渡って左岸の残存蛇体道(茂庭側)、青葉峠方向を望む。



写真－10⑤　左岸蛇体道から沢下流の残雪を望む。

その最大の難関箇所を何とか突破、その後も狭い道が続き藪化しているところもある。人が通ることがほとんど無くなってきているのではないだろうか。山腹の道を進み左に曲がり少し進むと石楠花が群生して綺麗な花を咲かせていたが、またまた難所の沢越え箇所に遭遇することとなる**(写真－11①～④)**。

写真－11①　危険箇所を越え蛇体道(茂庭側)を進む。

写真－11②　場所により藪化、蛇体道(茂庭側)を進む。青葉峠方向を望む。

写真－11③　蛇体道(茂庭側)のブナ林(樅林)

写真－11④　シャクナゲ(石楠花)群生

先の危険箇所の沢と同様に手前の道が数十メートルにわたって消滅している。捉まる草木も足場もなく大変危険な急崖を渡る。対岸（左岸）には蛇体道が残存しているのが見える。帰路のことだったが、往路の際には渡ってきているわけだけれども、改めてあまりの急崖を前に筆者はどこを上れば良いのか暫く逡巡してしまった。皆様の助言と先に渡った山口屋さんの手助けで辛くも渡りきったものである**(写真－12①～⑤)**。

写真－12①　青葉峠手前の難関。手前左側（沢右岸）道は完全消滅、対岸（沢左岸）には蛇体道残存。青葉峠方向を望む。

写真－12②　沢右岸を左岸蛇体道から望む。左側奥に残存蛇体道が見え、続くはずの手前の道は消滅急崖となっている。クビト峠方向を望む。

写真－12③　沢下流を左岸蛇体道から望む。写真右側上に残存蛇体道が見える。

写真－12④　必死の谷渡り、足場なく、捉まるものもなし。谷右岸から青葉峠方向を望む（帰路）。 山口屋散人さん提供

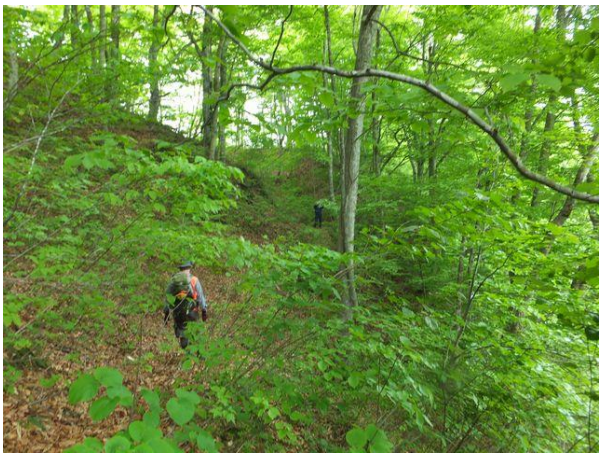
写真－12⑤　沢を漸く渡り左岸から青葉峠側を望む。 峰筋に近い山腹を行く。

青葉峠に到達

さて最後の難関を突破、沢対岸の蛇体道は相変わらずの杣道であるが十数分歩いたところで青葉峠と思われる峰が見えてきた。峰の手前は当初の予想に反して比較的急坂であったがそこを上りきったところが青葉峠であった。出発地から約 5.5ｋｍ（クビト峠から約 2ｋｍ）、約 4 時間半（同約 2 時間）、午後 1 時前の到着であった。この青葉峠の位置は dark さんの GPS ログで確認したので間違いないであろう。かすかに沢の流れと思われる音も聞こえるし、多分烏川であろう。

最終目的地青葉学園（蛇体鉱山跡）にはあと 200～300mのところである。この青葉峠からは、旧蛇体鉱山に向けて地元の方が「七曲」と称する急坂があるはずである。しかし、さっと見た限りでは、ブッシュの中にその場所（痕跡）を探すことはできなかった。たかが 2､300mとはいえそのような状況下では往復1時間以上はかかるであろう。とすると青葉峠へ戻るのは2時過ぎなる。昼飯抜きでも出発地へ戻るのは6時である。いくら日没が遅いとはいえ山の中は暗くなり危険である。皆で相談した結果残念ながらここで引き返すこととしたものである **（写真－13①～⑤、参考写真－3）** 。

写真－13①　青葉峠手前、蛇体道（茂庭側）状況。
クビト峠側を望む。



写真－13②　青葉峠手前の急坂。

写真－13③　青葉峠の峰先を回る。

写真－13④　青葉峠到着。学園方向を望む。
沢の流れの音もかすかに。
「七曲坂」発見できず。

写真－13⑤　青葉峠から北側を望む。大滝線歩道（森林管理局）は確認出来ない。青葉だけだ。

参考写真－3　烏川下流から青葉峠（推定左側の峰）を望む。右側は蛇体園舎跡。H291112

横川（本川烏川）の3回渡河も想定外であったが、そこから青葉峠までは山腹をまっすぐ進み平坦な道路で楽に行けるとばかり思っていただけに長時間のこの難路は意外であった。そういえば、青葉学園開設後すぐの昭和21年（1946年）7月、福島民報新聞の高橋重夫記者（平成6年青葉学園理事）が訪れた時のことが『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』(69頁、426頁）に掲載されている。それによると初めての山道にもかかわらず大滝から2時間で蛇体に到着しているがなかなか学園に着かないので途中で引き返そうと思ったという。また青葉峠の坂から学園が見えオーイ、オーイと呼びかけたら対岸の園舎の子供達が手を振ってオーイと応えてくれたという。当時の蛇体道の状況は現在とは全く異なっていたと思われるが今回青葉峠までで4時間半もかかっている。大滝のかた達は蛇体までかつて1時間半で行ったと言っているが、今では信じがたい話しである。ましてこの道路が鉱石運搬路として使われていたというのも考え難いものがある。そして、青葉峠から学園までは文字通り指呼の距離にあった事が想定されるのである（学園蛇体園舎は烏川川岸にあった。**参考写真－1、－3参照**）。

ところで、この青葉峠からは蛇体道とは別に北の方へ林道「大滝線歩道」（森林計画図※）があり烏川林道に合流（烏川林道終点と林道7号橋との中間点付近）するようになっている（約1.5ｋｍ)。この道を行けば烏川林道を経由し茂庭に抜けることができるけれども、「大滝線歩道」（青葉峠～合流点）は国土地理院の地形図には表示されていない。因みに、「大滝線歩道」の起点はクビト峠で、クビト峠から青葉峠までは我々の云う蛇体道に相当するものと思われ、この区間については前述の通り明治期5万分の1地形図に小径（1m未満）として表示されている。また、森林計画図によれば、クビト峠から旧西川橋付近までは林道「大滝第2線歩道」として表示されていて（起点付近数百メートルは民有林で除外)、我々の云うところの蛇体道に相当すると思われ、この区間についても前述の通り明治期5万分の1地形図に小径（1m未満）として表示されている。

（*）森林計画図：関東森林管理局の「阿武隈川森林計画区第5次国有林野施業実施計画図（平成26年度樹立）」(2万分の1。以下「森林計画図」))

この「大滝線歩道」についても青葉峠で現地をさっと見た限りでは確認することは出来なかった。

なお、筆者等は普通に「青葉峠」という名称を用いているけれども、これは青葉学園側でいわば勝手に名づけたもので一般には流布していないものである。現在は、我々のような好事家（こうずか）（物好きな人）たちだけが用いているいわばテクニカルターム（専門用語、業界用語）とでもいうようなものである。それについての命名経緯について拙著『青葉学園跡探索記』（ネット著書）から一応紹介しておきたい（33 頁）。

「前にも触れているが青葉学園（旧鉱山事務所跡）の住所については、『50 年史』（「刊行のことば」）では『旧伊達郡茂庭村蛇体』（『俗称』）となっているけれども、この蛇体と云う地名は気に入らないのでそれに替え付近一帯を**『青葉谷』**と命名、学園の名称を**『青葉学園』**（住所は**『信夫郡中野村大滝青葉谷』**と称す）としたという（昭和 21 年 5 月 27 日）。また、蛇体道から青葉学園の見えるところを**『青葉峠』**と命名した。みんなの姓も**『青葉姓』**とし名前で呼び合い全員青葉家の家族になったのだという（『50 年史』）。そこは、まさに青葉の名にふさわしく目に見える限り、青葉若葉の緑したたる平和郷であった。」（茂庭村字蛇体（蛇タイ）の住所を俗称としているのは正式には学園対岸（左岸）の蛇体鉱山（蛇体坑）の住所だからであろう。学園側（左岸）の正式字名（あざめい）は字枯松沢（かれまつざわ）になるようだ。）

その青葉谷へ引っ越してきたのは前記しているが 72 年前の昭和 21 年 5 月 9 日で、青葉峠等の名付けをおこなったのは上記引用の通り同年 5 月 27 日すなわち丁度今頃になる。それぞれのところで林の状況写真を紹介しているが辺り一面どこを見ても青葉だらけである**（写真－6②、写真－11③、写真－13⑤など参照）**。

ということで長居は無用、午後 1 時過ぎ青葉峠を引き返す。少し戻ったところで若干広めのところがあったのでそこで昼食を取る事とする。食事時間は 30 分程度である。疲労のせいか食欲がない。しかし、山口屋さん提供の現地調整の熱い味噌汁が実に美味しく疲れを癒やしてくれ食欲も出て来た。いつもながらありがたい。雨がぱらついていたけれども深い林の中なのでほとんど影響はない。筆者は、カッパを着用したがすぐにぬいている。**（写真－14）**

暗くならないうちに下山すべく急ぐ、クビト峠には午後 3 時過ぎ到着、4 時頃には雨が強くなってきたのでカッパを再着用した。旧西川橋に戻ったのは夕方 5 時前であった。青葉峠を 2 時に出ていたら相当危険であったろう**（写真－15）**。

写真－14　昼食（青葉峠から約 200m手前）。恒例山口屋さん提供の味噌汁がうまかった。

写真－15　無事帰還　16:50
E13 新西川橋（4 代目）下。
赤い橋は現国道 13 号西川橋（3 代目）

山野草と樹木

今回の探索では多くの山野草などや美しい花をつけた樹木に出会った。ここにまとめて紹介しておきたい。

【山野草類】

野草類は、蛇体道の大滝側では多くの種類が花期を過ぎていたけれども、山奥の茂庭側ではまだ間に合った。イワウチワ（岩団扇）の群落はあちこちで見受けられたが最盛期は過ぎていたようで花数は少なかった。ピンクの可憐な花がまだ残っているものがあり珍しい白花のものも見ることができた**(野草－1①②)**。

（野草－1①）　白花イワウチワ（岩団扇）

（野草－1②）　赤花（ピンク）イワウチワ（岩団扇）

シラネアオイ（白根葵）の群落は見られなかったがあちこちに単独で咲いていた。乱獲されたのかもしれない**(野草－2)**。

（野草－2）　シラネアオイ（白根葵）

（野草－3）　ギンリョウソウ（銀竜草）、別名　ユウレイタケ

ギンリョウソウ（銀竜草）、別名ユウレイタケには久しぶりに出会った**(野草－3)**。

ゼンマイ（薇）は山野草というより山菜であるがこの蛇体の奥地はその宝庫であったという。かつて地元大滝の方はゼンマイを生活の糧の一部にしていたということである。大滝集落の西側端の旧宮内屋旅館（高野家）前には大きな八重桜の木があって花の咲き具合に会わせて枯松沢にゼンマイ採りに行ったものだと云う**(野草－4)**。

大きなサルノコシカケが三つ並んでいた**(野草－5)**。

（野草－4）　ゼンマイ（薇）、辺りの急崖はゼンマイ畑だ。

（野草－5）　サルノコシカケ

【樹木類】

花期の盛りのものを多く見ることができた。時期的に山桜などはもちろん見ることはできなかったけれども、シャクナゲ（石楠花）の群落はあちこちに見られ見応えのある花が咲いていたし、ツツジ（躑躅）類も多く見られたがその名前は明確には分からない。ムラサキヤシオ（紫八染）、ミツバツツジ（三葉躑躅）、ドウダンツツジ（満天星（灯台）躑躅）いずれ数多くの種類があってよくわからないので筆者の独断で名前を付しておいた。**（樹木－1～4 ）**

（樹木－1 ）　シャクナゲ（石楠花）

（樹木－2）　ムラサキヤシオ（紫八染）

（樹木－3）　ミツバツツジ（三葉躑躅）

（樹木－4）　ドウダンツツジ（満天星（灯台）躑躅）

ウツギ（空木）は蛇体の深い山の中では見かけなかった。大滝集落の中とか、蛇体道の入口など道路に面したところで目にした。オオツクバネウツギ（大衝羽根空木）という名は初めて聞いたけれども、秋に山に行くと羽子板で使う羽根のようなものがぶら下がっている木を目にすることがある。今回紹介したのはその木の花の時期ものということになる。**（樹木－5､6 ）**

（樹木－5）　ウツギ（空木）　旧葭沢橋

（樹木－6）　オオツクバネウツギ（大衝羽根空木）

オトコヨウゾメやアオダモ（青梻）というのも今回初めて目にしたものである**（樹木－7､8 ）**。

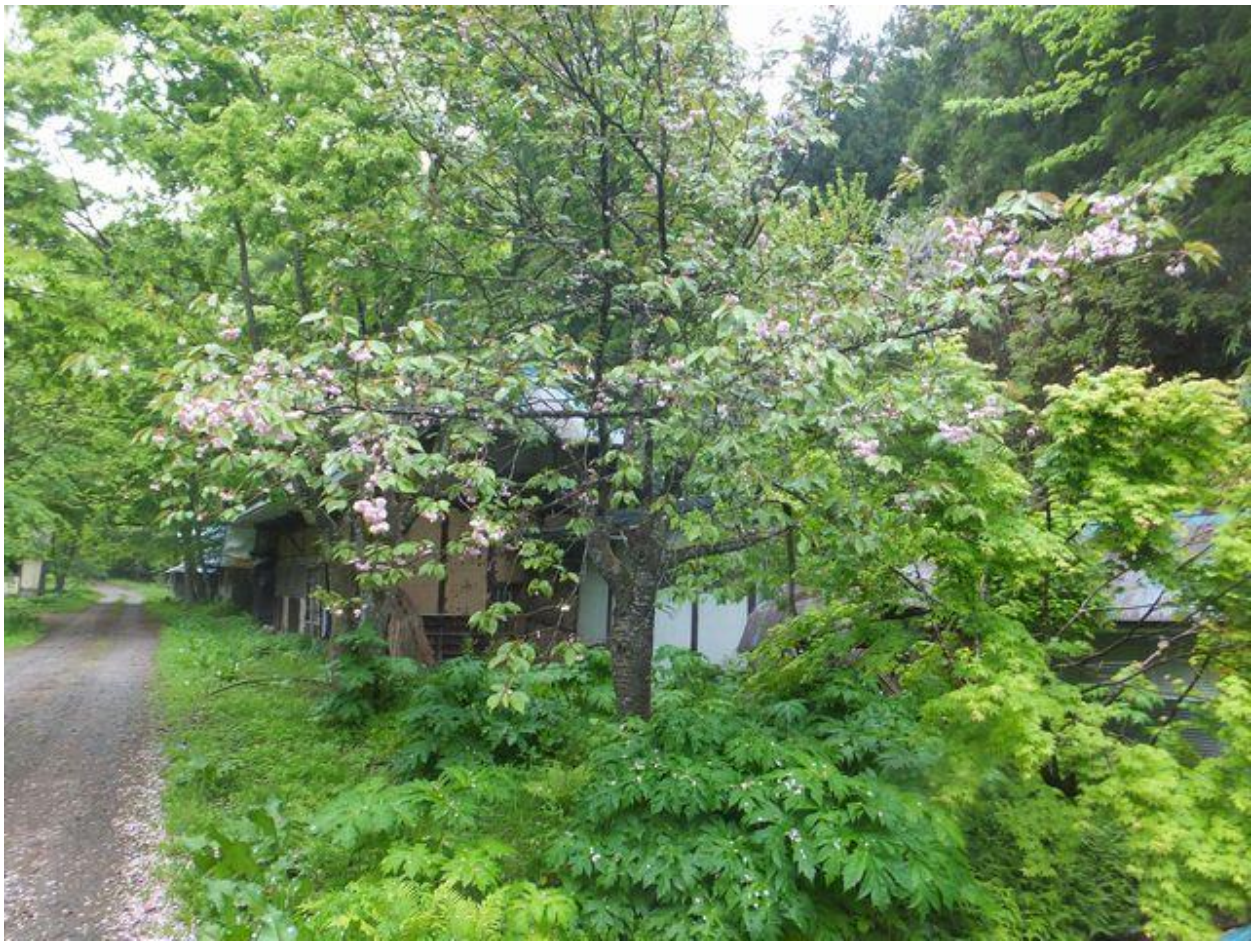
（樹木－7）　オトコヨウゾメ（スイカズラ科、ガマズミ属）

（樹木－8）　アオダモ（青梻）

（樹木－9）　名残のコブシ（辛夷）

コブシ（辛夷）は早春の花で今の時期にあるとは思わなかったので、最初見たときは何の木か分からなかったものである。これも何カ所かで名残の花を咲かせていた。小枝を折って匂いを嗅いてみたらコブシの独特のあの芳香がしたので間違いないであろう**（樹木－9 ）**。

大滝集落内の八重桜がまだ花を付けていた。5 月のはじめに見に行ったときは咲きはじめであった**(樹木－10)**。



（樹木－10）　名残の八重桜
（大滝・渡辺清治家）

樹木は他にも沢山あるが身近に利用されていたクロモジ（黒文字）、正月飾りに使用されるユズリハ（譲葉）の二つを紹介しておきたい**(樹木－11､12)**。

（樹木－11）　クロモジ（黒文字）香気あり、
楊枝、箸の材料。

（樹木－12）　ユズリハ（譲葉）、正月飾りに使用

樹木名については大滝会 HP 管理人紺野文英さんにご協力を頂きました。ありがとうございます。一部樹木名については、前述しているように筆者の独断によるものがあり必ずしも正しいものではないことをお断りしておきます。正しい名前をご存知の方があればご助言下さい。

おわりに

今回もまた蛇体道からは青葉学園蛇体園舎跡には到達できなかったけれども、素晴らしい 5 月の新緑の山を堪能できました。どこまでも青葉が広がる広大な森林のフィトンチッド（樹木などが発散する殺菌力を持つ化学物質)のせいであろうか気分爽快となり楽しい探索会でありました。機会があれば再び挑戦したいとも思いますが、恐怖の沢渡りの為にはスコップ等を持参し道を付けて行く必要があるでしょうね。また他にも行きたいところが沢山あって時間を回せないかも知れません。

この度も同行の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。
大滝会 HP 管理人紺野様には編集作業をお願いしました。心から感謝申し上げます。

－ 終 －